

川べり

堤に冬枯れの兆し
川面に映る景色は薄青く
カキンと響くバットの一振り

つい、うとうととして一駅
乗り越してしまったから・・・
でも、それだけでもないだろう

やっとのことで歩きながら
幼い子はゴルフのクラブを持ち上げ
手を叩いて笑う若者

帝釈天の参堂をひとり
ネクタイにブレザー姿では
少し場違いだったろうか

自転車の後ろを駆ける白い犬
子供らの声は天に届き
川面はどこまでも波一つなく

何だかほっとして
何だかふんわりと匂いがする
「生活」というより「暮らし」と言おう

手をつなぎ、あるいは並んで歩き
家族がいる、恋人がいる、友達がいる
ごちゃごちゃした世間は堤の外側です

気が付くと肩が冷えていた
そのとき目の前の鉄橋を
赤い電車が渡っていった

(1985.11.16)